

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年10月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻井昭雄様

所属部局・研究科 工学研究科・都市環境工学専攻

職名・学年 助教

氏名 浅田安廣

助成の種類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	(和文)第18回 水中の健康関連微生物に関する国際シンポジウム (英文) 18th International Symposium on Health-Related Water Microbiology		
発表題目	(和文)日本における疫学情報および存在実態に基づいた飲料水曝露によるカンピロバクター感染に伴う障害調整生存年数の定量化 (英文) Estimation of Disability Adjusted Life Years Associated <i>Campylobacter jejuni</i> in Drinking Water Based on its Occurrence in Source Water and Japanese Epidemiological Information		
開催場所	ポルトガル・リスボン市・リスボン大学		
渡航期間	平成27年 9月11日 ~ 平成27年 9月21日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。 「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	交通費:186,830円	
		日当: 51,200円	
		宿泊費:128,800円	
合計:383,600円			
不足分は他経費から支出。			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団からの助成のおかげで、ワークショップを含むシンポジウム全日程に参加することができました。そして、多くの研究者と交流ができ、海外研究者とのネットワークを多く構築することができました。このように、助成により渡航援助していただくことで、特に参加機会が少ない若手においてただ発表するのみではなく、多くの研究者の発表を聴講し、議論し合い、良好な関係を築くことができます。今後とも助成が継続することを望んでおります。		

京都大学教育研究振興財団助成事業より、若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表の助成を受け、第18回 水中の健康関連微生物に関する国際シンポジウム (18th International Symposium on Health-Related Water Microbiology (通称: WaterMicro)) に参加するとともに成果発表を行った。WaterMicro は、国際水協会 (International Water Association, IWA) 内の水の健康関連微生物に関する Specialist Group が二年に一度開催するもので、今回で18回目となる。今年度の開催地は、ポルトガルのリスボン市内にあるリスボン大学であった。大学自体は都市中心部からは少し離れており、私は大学に近辺エリアで宿泊をした。そのおかげもあり、シンポジウム全日程にしっかりと参加することができた。

シンポジウム自体はワークショップと口頭ならびにポスター発表で構成されている。まず発表についてであるが、シンポジウムの発表内容としては、病原微生物の汚染源特定 (Microbial Source Tracking (MST))、定量的微生物リスク評価、発展途上国の衛生環境、ウイルスの評価手法検討、疫学調査などの研究発表が行われていた。私は、その中で定量的微生物リスク評価のセッションで「Estimation of Disability Adjusted Life Years Associated *Campylobacter jejuni* in Drinking Water Based on its Occurrence in Source Water and Japanese Epidemiological Information」という題目で口頭発表を行った。口頭発表では、日本において食中毒菌としても重要である *Campylobacter jejuni* の健康影響を障害調整生存年数 (DALYs) という新たな指標で定量化し、この指標を用いて水道水の微生物学的安全性を評価した成果について報告した。この分野に関わる研究者が多く参加しており、特に私が良く読んでいる論文の著名な研究者から2件の質問があった。その内容は、日本での疫学情報に関する内容と *Campylobacter jejuni* の汚染源に関する内容であった。またセッション終了後には、研究のより深い内容について多くの研究者と議論することができ、改めて自身の研究内容の重要性について確認できた。シンポジウムでの聴講は著名な研究者の発表のみならず、この分野における最先端研究の取組みについても聴講できた。その中で、病原ウイルスの検出・同定手法、リスク評価手法、疫学調査に関連する内容については、セッション終了後に発表者に質問し、より深く発表内容について理解ができた。このように、このシンポジウムは水の健康関連微生物に関する共通分野の研究者が集まる専門的な研究集会であることから、私自身の研究発展にとっても有意義なものであったといえる。

次にワークショップについてであるが、WHO が中心となり、世界全体で重要視されているテーマ (エボラウイルス、薬剤耐性菌、病原微生物に関するプロジェクト紹介など) について、基調講演やグループディスカッションが行われた。WHO が主体として、このような話題について聴講できるのも、このシンポジウム特徴といえる。そしてここでは、特に現在の世界での

衛生問題に関する取組みについて再認識するとともに、関連する分野の新たな知識を増やし、理解を深めることができたことから、ワークショップへの参加は大変有意義であったといえる。

またこのシンポジウムでは、日本国内外問わず、多くの研究者と交流することができた。特に私自身の研究分野と関わりが深い著名な研究者とは、自身の研究やその分野の研究についてコーヒースタンド等の時間を使い、議論することができた。そのおかげもあり、帰国後も連絡を取り合っており、とても良い研究者間のネットワークが構築することができたといえる。

今回の渡航では、9月11日に日本を立ち、21日に帰国しており、リスボンには9月12日～20日と9日間滞在した。その行程で、シンポジウムのみではなく、その後の交流も含め、研究者間のネットワーク構築ができ、また今後の研究の発展につながる情報や着想が得られた出張となり、期待以上の経験を得られた。最後になるが、京都大学教育研究振興財団による助成に心より御礼申し上げます。